

# 4世紀におけるヤマト王権と加耶の対外交流 —王権内の動向に着目して—

井上主税\*

## 目次

- I. はじめに
- II. 先行研究の成果と課題
- III. 対象資料の検討
  1. 倭系遺物の出土状況等の整理
  2. 最近の調査研究が提起する問題
- IV. 4世紀～5世紀初頭におけるヤマト王権の政治的動向
  1. 4世紀前半～後半—王権の伸長と対外交渉
  2. 4世紀末—朝鮮半島情勢の変化と百舌鳥・古市古墳群の出現
  3. 5世紀前葉以降—ヤマト王権と朝鮮半島南部の対外交流の多様化
- V. まとめ

## 要旨

金海大成洞古墳群出土の倭系遺物の内容や、日本列島における加耶系遺物出現期の様相から、これまでの研究とは異なり、大和東南部勢力の段階から朝鮮半島南部の加耶との交渉が行われていたことを指摘し、また4世紀後半以降の対外交渉と関連する沖ノ島祭祀遺跡においても、倣製三角縁神獸鏡が出土していることから大和東南部勢力との関わりを論じた。

筒形銅器および巴形銅器は、大和北部勢力（佐紀古墳群）との連携を示す遺物と評価されるが、特定の古墳群や地域で副葬が継続せず、分布の核となる古墳群や地域もみられないことは、特定の有力勢力の配布と関連づけることが難しいことを示唆している。また、両者は日本列島内では共伴しない遺物でもあり、それぞれの遺物を副葬した古墳が別勢力として存在していた可能性も指摘した。すなわち、4世紀半ば以降のヤマト王権内は、東アジア情勢の変動とともに過渡期的な政治状況を示しており、ヤマト王権内の各勢力と周辺各勢力がそれぞれのつながりとなって複数構造化したこの状況は、河内平野に出現した百舌鳥・古市古墳群が隆盛を迎える時期まで続いた。

キーワード | 倭系遺物、ヤマト王権、金官加耶、大成洞古墳群、東アジア情勢

\* 関西大学文学部准教授

## I. はじめに

これまで金海大成洞古墳群や良洞里古墳群などから出土した倭系遺物を通じた金官加耶と倭の対外交渉について拙稿を発表してきた（井上2006, 2014aなど）。そのなかでは、日本列島出土の朝鮮半島系遺物からみた、いかにすれば日本列島からの視座による古代日朝関係だけではなく、朝鮮半島出土の倭系遺物による双方向的な分析によって、初期鉄器時代から三国時代にかけての関係史における新たな側面を明らかにしてきた。

本稿では、先行研究の成果と問題点を簡潔に整理したうえで、古墳時代前期から中期初めの4世紀における倭（ヤマト王権）と加耶のネットワーク、当時の対外交渉についてあらためて考えてみたい。具体的には、朝鮮半島南部（加耶）出土の倭系遺物に関する研究成果をもとに、日本列島出土の朝鮮半島系遺物の出土状況などを加えて再検討する。とくにヤマト王権中枢が位置した近畿地方中央部（のちの畿内）から出土した朝鮮半島系遺物や関連遺物に注目する。

このテーマについては、考古学のみならず文献史学においても議論されてきたものである。これまで多くの研究成果が蓄積されているが、近年の朝鮮・韓国考古学の成果をふまえ、あらためていくつかの疑問を呈し、今後の検討課題を提示する。

## II. 先行研究の成果と課題

洛東江下流域では、金海大成洞古墳群や良洞里古墳群、東萊福泉洞古墳群の発掘調査を通じて、倭系遺物が確認されたことで、日韓両国の研究者の関心を集めた。倭系遺物には、土師器系土器、巴形銅器、筒形銅器、銅鏃、鏃形石製品、紡錘車形石製品、筒形石製品、鞆、壺、貝製品などが該当する。

申敬澈氏によってこれらの倭系遺物が検討された結果、対倭交渉の対象が時代によって交替することが指摘された（申敬澈1993）。つまり、弁辰狗邪国は主に北部九州と、金官加耶は畿内と交渉があったとみた。ただし土師器系土器の系譜から、「対倭交渉の窓口が畿内に一元化されたのではなく、依然北部九州を含めた日本列島各地に多元化されていた」とした（申敬澈2001）。洪漣植氏も4世紀前半から近畿の大和政権との交流がなされたとみた。4世紀中葉には大成洞古墳群において多様な系統の外来系遺物が出土し、倭系遺物には北部九州系を中心に、山陰系と近畿系がみられるとした。多様な外来系遺物の集中からみて、この時期にはこれまで楽浪・帯方郡が主導してきた対外交渉の主導権を大成洞古墳群造営集団が掌握したと結論づけた（홍보식2014）。両氏の見解について賛同する部分も多いが、当時の交流内容や加耶の交渉相手である倭の具体的な勢力についての言及はなされていない。

日本考古学界では、福永伸哉氏が、筒形銅器や巴形銅器は大和北部および河内勢力という新興勢力の連携を象徴する文物であり、これらの勢力が古墳時代前期後半に対朝鮮半島交渉を積極的に展開したとみた。とくに、鉄素材という必需品を多量に入手するという物量作戦によって、畿内中央政権内で大和東南部勢力にかわって主導権を獲得したという（福永1998, 2005）。古墳時代前期後半から中期にかけての政治的動向については、「魏晋王朝の権威を背景にして三角縁神獸鏡を利用した邪馬台国政権・初期大和政権（3世紀

中葉~4世紀中葉)、西晋滅亡後に朝鮮半島南部に台頭した伽耶勢力と交渉関係を持ち鉄製甲冑を威信の証とした河内政権前半期(4世紀後葉~5世紀前葉)、中国南朝との間で復活した冊封関係を軸にいわゆる同型鏡群や帯金具を入手・配布した河内政権後半期(5世紀中葉~後葉)」という変化を想定する。

田中晋作氏は、畿内およびその周辺地域で、筒形銅器や巴形銅器が定型化以前の甲冑(方形板革綴短甲)および定型化初期の甲冑(三角板・長方板革綴短甲)と高い比率で共伴する点を指摘した。そして、甲冑<sup>1)</sup>を含めた三者が朝鮮半島南部から、または朝鮮半島南部の特定地域を経由し完成品として一緒に導入された可能性も提示した。そして、このような新たな物品は、畿内およびその周辺地域では既存の有力勢力を対象としたものではなく、古墳時代前期後半以降に新たに台頭した新興勢力を対象としたものであったとした(田中晋1996, 1998, 2000)。そのうえで、古墳時代前期から中期における畿内政権の主導権をめぐる複数の有力勢力間で確執があったと主張する。

福永、田中両氏ともに、筒形銅器と巴形銅器を畿内の新興勢力を対象とした遺物とみるが、その主導勢力については立場の違いをみせる<sup>2)</sup>。福永が大和北部および河内平野の勢力とみる一方、田中は「筒形銅器と同様に、ただちに巴形銅器の生産、製品としての導入、また供与主体者を特定できるような状況にはない」(田中晋2000)としたが、現在は佐紀・馬見古墳群の勢力ときわめて関係が深い遺物として、筒形銅器・巴形銅器・鉄製短甲を挙げている(田中晋2009, 2012)。佐紀古墳群から筒形銅器や巴形銅器が出土していない点については、石製模造品に着目して自説を補強する。また田中は、福永が河内平野の勢力も含めて考えている点については批判的で、筒形銅器の出土が、古市古墳群の初期段階にあたる盾塚古墳例のみで、その後継続しないことを指摘した。

両氏は、ヤマト王権内の主導権の交替を想定し、筒形銅器および巴形銅器が既存の有力な勢力ではなく、古墳時代前期後半以降に台頭する新興勢力と関連する遺物と指摘した点は注目されよう。当時の彼我の文物交流を通じて古墳時代の政治的動向を明らかにしようとした分析方法は評価される。

しかし、筒形銅器は特定の古墳群や地域で副葬が継続せず、分布の核となる古墳群や地域もみられないことは、古墳時代前期の三角縁神獸鏡や大型倭製鏡とは異なる様相といえる。また、筒形銅器は佐紀古墳群においてこれまで出土例がない。そのため、これを特定の有力勢力の配布と関連づけることができるかは疑問である。

巴形銅器も筒形銅器と同様の分布様相をみせており、鐘方正樹氏による批判(鐘方2005)があるように、新興勢力ではなく既存の有力古墳群である玉手山古墳群(5号墳)において、すでに前期中葉には副葬

1) 朝鮮半島出土の甲冑については多くの議論がある。日本列島では古墳時代前期半ばには豎矧板革綴短甲・方形板革綴短甲が出現する。これらは縦長鉄板構造であり、朝鮮半島南部の縦長板釘結板甲の影響を受けたものとみられる。一方、全体の構造や製作技法上は違いも大きく、同一系統とみるのは難しいとする橋本達也氏はこれらの短甲を日本列島製とみる(橋本1996)。

2) 両氏の見解における重要な違いは、筒形銅器と巴形銅器を朝鮮半島製とみるのか、日本列島製とみるのかという点にもある。田中氏は、筒形銅器と巴形銅器、そして定型化以前の甲冑から定型化した初期の甲冑を、朝鮮半島で製作された、もしくは朝鮮半島を経由してもたらされた物品の可能性を示唆した。それに対して福永氏は、筒形銅器が副葬された古墳の被葬者を大和北部および河内平野の新興勢力と結びつけた人々または勢力とみて、朝鮮半島南部で出土した倭系遺物は新興勢力が朝鮮半島南部の首長層を訪問した時の土産物的な倭の「珍品」であったとする(福永1998)。その後、福永氏は筒形銅器について朝鮮半島製の可能性もおおいにありうるとするが、本文中では朝鮮半島南部から出土する代表的な倭系遺物として扱われている(福永2005)。

されている<sup>3)</sup>。また、巴形銅器と筒形銅器の共伴例は交野東車塚古墳のみであり（井上2004）、巴形銅器も定型化以前の甲冑との確実な共伴例はない（田中晋2000）。

このほか寺沢知子氏は、4世紀前半期（布留2式期）の政権中枢の状態を「政権弛緩期」として、政権中枢の首長たちが個々に倭系威信財を創出して、地方の首長との連携を目論んだとする。たとえば、東大寺山古墳が平根式鍬形石製品・振り鉄鍬・埴形石製品を、新沢500号墳が筒形銅器・筒形石製品・瑪瑙製勾玉などを刷新・創出したとみている（寺沢知2017）。

古墳時代前期半ばに立て続けに起こった西晋の滅亡、楽浪・帯方郡の滅亡によって、ヤマト王権の対外関係に大きな影響があったことは多くの研究者によって指摘されている。新たな威信財として倣製三角縁神獸鏡が製作されたことはその対応策の一つと考えられる（福永2005）。ただし、寺沢のように前期後半から出現した器物を、各首長が個々に刷新・創出した威信財とみるにはすべてが威信財かどうかの問題、また現時点での資料の出土数や分布状況などから首肯しがたい面がある。

結果的に福永、田中両氏の研究は、特定の器物の動きを抽出し、それを特定勢力と直接結びつける傾向が強いように思われる。また日本列島の古墳を分析対象としたため、朝鮮半島南部の筒形銅器および巴形銅器出土古墳の性格が明らかになっていない。そのため朝鮮半島南部、すなわち金官加耶における政治的状況を正確に把握する必要がある。

以下では、筒形銅器と巴形銅器のみを取り上げ新興勢力と関係づけるのではなく、古墳時代前期半ばから同様に出現する鍬形石製品なども含め、かつ近畿地方中央部出土の加耶系遺物も対象として、当時の交渉関係を論じてみる。

### Ⅲ. 対象資料の検討

#### 1. 倭系遺物の出土状況等の整理（図1～3）

朝鮮半島南部における倭系遺物の出土様相については、拙稿で時期別の様相をまとめている。ここでは、筒形銅器・巴形銅器・鍬形石製品の日本列島における状況を対象として簡潔にまとめる。

まず、筒形銅器は加耶製、巴形銅器や鍬形石製品を含めた石製品は日本列島（倭）製と考えている。筒形銅器に関しては、日本列島製の可能性も指摘されるが（山田2000, 柳本2001など）、すでに指摘したいくつかの理由とともに以下の点も加えておく。①日本列島における筒形銅器の分布状況は、巴形銅器や鍬形石製品のそれとは異なるものである。また筒形銅器は、巴形銅器とは交野東車塚古墳のみの共伴例にすぎず、鍬形石製品とも共伴しない。②朝鮮半島南部では、他の倭系遺物に比べて、筒形銅器の分布範囲が広く、その出土数の多さも特異である。③大成洞古墳群において、他の倭系遺物が比較的限定された時期に副葬されるのに対し、筒形銅器は金官加耶のほぼ全時期を通じて副葬される。その一方で福泉洞古墳群において、4

3) 筒形銅器が、既存の有力古墳群である向日丘陵古墳群において副葬されていたことも同様である。

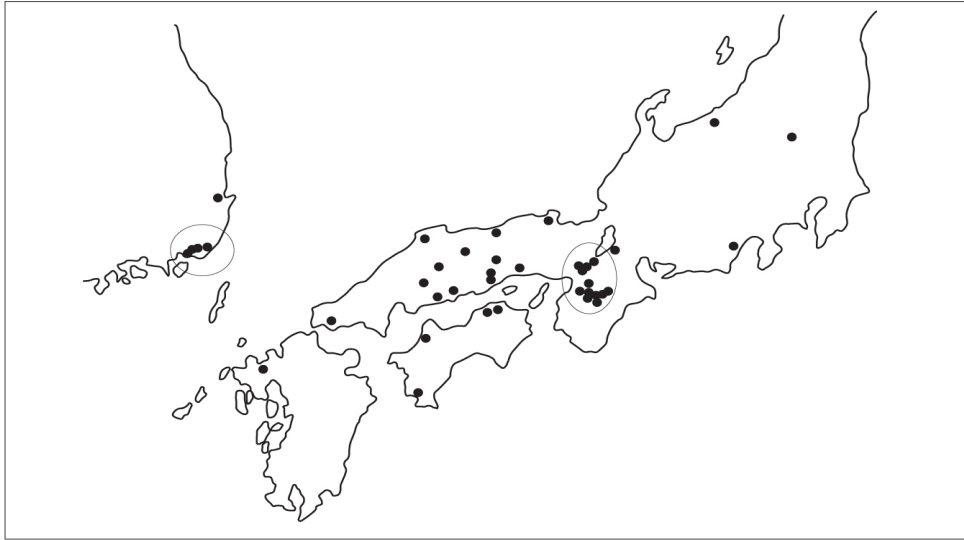


図1 朝鮮半島と日本列島の筒形銅器分布図



図2 朝鮮半島と日本列島の巴形銅器分布図



図3 朝鮮半島と日本列島の鏃形石製品分布図



世紀後半頃から認められる新羅の影響とともに筒形銅器の副葬は終了する。筒形銅器が日本列島製であれば大成洞古墳群と同様、少なくとも5世紀初めまで副葬が継続したものとみられる。実際に、新羅の影響如何にかかわらず、福泉洞古墳群では倭系遺物の副葬が4世紀初めから5世紀後半まで確認できる。

ここで、各遺物の共伴関係を整理すると以下の通りである。

日本列島では、

1. 筒形銅器と巴形銅器は、1例(交野東車塚古墳)を除いて共伴しない<sup>4)</sup>。
2. 筒形銅器と鍬形石製品は共伴しない。
3. 巴形銅器と鍬形石製品は一部の古墳で共伴する。

一方、朝鮮半島南部では

4. 大成洞古墳群の筒形銅器出土古墳10基のうち、巴形銅器との共伴例は2基ある。(大成洞2・88号墳)
5. 大成洞古墳群の筒形銅器出土古墳10基のうち、鍬形石製品との共伴例は1基ある。(大成洞2号墳)
6. 大成洞古墳群の巴形銅器出土古墳4基のうち、鍬形石製品との共伴例は2基ある。(大成洞2号墳・13号墳)
7. 筒形銅器と巴形銅器、鍬形石製品の三者が共伴する例がある。(大成洞2号墳)

また、日本列島においては、筒形銅器出土古墳は墳丘形態や規模、または埋葬施設に特定の共通項を見いだすことができない。その分布が単独かつ散在することから、多くの古墳が古墳時代前期後半以降に台頭する新興勢力と考えられる。共伴遺物には定型化以前の甲冑および定型化初期の甲冑、腕輪形石製品(とくに石釧)が顕著である(田中晋1996, 福永1998)。

巴形銅器出土古墳は、半数以上が近畿地方中央部およびその周辺に分布する。筒形銅器と同様、古墳時代前期後半に台頭する新興勢力であったとするが、墳丘の規模や副葬品の内容からみて、筒形銅器出土古墳よりも明らかに優勢である(福永1998)。

鍬形石製品出土古墳は近畿地方中央部に集中しており、筒形銅器や巴形銅器に比べ、その分布範囲は限定的である。出土古墳の大部分が前方後円(方)墳であり、比較的規模の大きな古墳といえる。大和東南部のメスリ山古墳、すなわち既存の有力勢力が含まれており、筒形銅器および巴形銅器副葬古墳とは異なる様相をみせる。その一方で津堂城山古墳のように、明らかに古墳時代前期後半以降台頭した新興勢力も含まれている。メスリ山古墳では鍬形石製品のほか、合子形石製品の副葬も開始されており、緑色凝灰岩製石製品の多量副葬も認められる。

## 2. 最近の調査研究が提起する問題

4世紀の倭系遺物に関する最近の研究として、沈載龍氏の論考(심재용2016)について考えてみたい。沈

---

4) 東潮氏は、巴形銅器と筒形銅器の存続時期の差とみる(東2005)が、前期後半から中期初めにかけて併行する。

氏は、金官加耶出土の中国東北系と日本(倭)系の威勢品(威信財)について、それぞれ詳細に検討されており(表1)、このなかで日本系威勢品の副葬類型を5つに分類している。日本系威勢品としては銅矛、筒形銅器、巴形銅器、銅鏃、凝灰岩製石製品(紡錘車形・鏃形・筒形)を取り上げ、これらの威勢品が前期陶質土器Ⅲ段階(4世紀第2四半期)から確認できるとし、この段階から近畿と本格的な交流があったとされる。日本系威勢品の副葬類型は以下の通りである。

表1 外来系遺物および鉄素材出土の大成洞木槨墓の現況(심재용2016を一部改変)

부덤	면적(m <sup>2</sup> )	일본계 청동기					중국 동북계 유물	투구	판갑	칼갑	철촉	철제 마구	철소개	도검 토기
		통형	과형	촉	모	석제								
29	53.8	.	.	.	.	.	동북, 금동관	.	.	.	정각 34, 270	.	(43)	전기 I
주2	7.8	.	.	.	.	.						10		
13	39.7	.	Ⅲa(5), 편(1)	.	.	촉15, 이형1	.	.	.	85	.	.	전기 III	
91	39.4	Ⅱb	.	.	.	금동운주·마령·마면, 청동운주·마령, 운모 청동세·완, 칠완	.	.	.	.	비4, 운주3, 교구5, 패운주23	.		
18	15.9	Ⅱa, Ⅱb	.	.	.	방추차형	1	.	.	92	.	.		
15	13.3	Ⅲ1	.	.	.	.	.	.	.	3	.	.		
95	14.6	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	(50)		
주3	5.6	.	.	.	.	.	금박구슬	.	.	.	.	.		
2	40.8	Ⅱb, Ⅲ1	Ⅱb	.	.	촉2	운주형동기2, 수대경	1	2+	패갑, 경갑	.	비3,		(110)
70	29.8 25.4	(2?)	.	.	.	.	금동대금구편, 금동운주, 연호문경	2	2	○, 경갑	231+	재갈편, 교구1	(5)	
88	35.6	Ⅱb(3)	I a(2) I b(4) Ⅱb(6) 편(1)	5	1	방추차형 2	금동대금구	○	방형	.	정각 25, 182	.	(4)	전기 IV
94	(29.8)	Ⅲ1(3), Ⅲ2	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	100+	
23	27.7	.	편(2)	.	.	.	박국경	.	.	패갑	1	.	(60)	
68	20.5	.	.	.	.	.	은환	1	○	○	5	비1, 등자1, 안장1, 교구2	.	
47	(10.0) 6.7	.	.	.	.	.	동북	1	1	.	.	비1, 등자1, 교구1	.	
3	28.9 16.0	.	.	.	.	.	..	.	4	2, 패갑 경갑1	.	행엽1,	(3)	전기 V
39	16.5 8.2	Ⅱb, Ⅲ1	.	.	.	.	.	1	4	2	2	비1	.	
1	34.8 14.2	Ⅱb(6), Ⅲ1, Ⅲ2	.	.	.	.	내연금구, 운주군	1	1	3	111	마주1, 교구9, 행엽2, 등자2, 운주	(40)	전기 VI
11	22.0	1	.	.	.	.	.	.	.	패갑	300+	비1, 마갑	○	
57	(14.6)	.	.	.	.	.	청동운주4	1	5	1	.	마주1, 비2, 등자2, 교구1	.	
93	25.0	.	.	.	.	.	금동령	.	.	.	.	.	.	중기 I

( ) 殘存値 및 殘存遺物 數量

カ型：巴形銅器および筒形銅器と、鏃形石製品ないしは銅鏃が副葬される。

(大成洞2・88号墳が該当する)

ナ型：巴形銅器と鏃形石製品が副葬される。(大成洞13号墳が該当する)

タ型：筒形銅器が、紡錘車形石製品ないしは瑪瑙製鏃と副葬される。

(前者は大成洞18号墳、後者は福泉洞38号墳が該当する)

ラ型：巴形銅器のみ副葬される。(大成洞23号墳が該当する)

マ型：筒形銅器のみ副葬される。

(大成洞91・15・70(主)・94・39・1号墳、筒形銅器が副葬された大部分の良洞里・福泉洞古墳が該当する)

この分類によって、巴形銅器と鏃形石製品は大成洞古墳群にのみ副葬されており、さらに巴形銅器と鏃形石製品が共伴する「カ型」と「ナ型」は大成洞古墳群のなかでも大型1式墓(墓壙面積35㎡以上)にだけみられるとする。中国系金銅製威勢品も大型1式墓にのみ副葬されることから、沈氏はこの大型1式墓を「金官加耶の最高支配者の墳墓」とみた。

金官加耶において、巴形銅器と鏃形石製品を副葬した古墳の階層が非常に高いとの指摘をふまえ、あらためてこれらの遺物に注目してみたい。ただし金官加耶では、日本列島で確認された鏃形石製品のみを副葬した古墳は確認できず、鏃形石製品は巴形銅器とともに副葬されている点には注意を要する。

次に、巴形銅器、巴形銅器および鏃形石製品を副葬した古墳に重点を置き、日本列島における状況を検討してみたい。近畿地方中央部およびその周辺において巴形銅器および鏃形石製品を副葬した古墳をあげておく。各時期は埴輪検討会の畿内円筒埴輪編年(小浜2003)による(図4~6)。

I-4期 大阪府玉手山5号墳(巴形・鏃形)

II-1期 奈良県東大寺山古墳(巴形・鏃形)、奈良県富雄丸山古墳(巴形・鏃形)

II-2期 奈良県佐味田宝塚古墳

III-1期 大阪府津堂城山古墳(巴形・鏃形)、大阪府交野東車塚古墳、大阪府和泉黄金塚古墳、京都府鳥居前古墳、三重県石山古墳(巴形・鏃形)

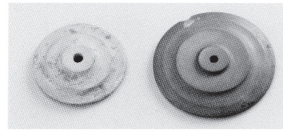
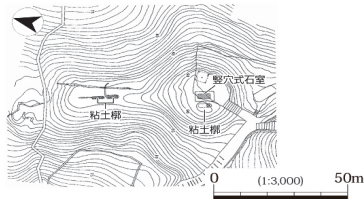
III-2期 兵庫県行者塚古墳

III期 滋賀県大越塚古墳

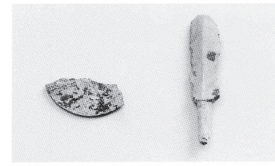
以上のような日本列島における状況からは、現時点で古墳の数は少ないものの、II期(古墳時代前期後半)とIII期(古墳時代前期末~中期前半)で様相が異なるようにもみえる(図7)。大和においてII期にみられた巴形銅器出土古墳がIII期には確認できない一方、III期になると河内・和泉を中心に分布しており、巴形銅器出土古墳の数もピークを迎えることがわかる。

沈氏は、金官加耶において巴形銅器と鏃形石製品は、前期陶質土器III~IV段階(4世紀第2四半期~第3四半期)の短い期間に副葬されたことを指摘するが、日本列島の巴形銅器出土古墳数のピークとはずれているようにみえる。



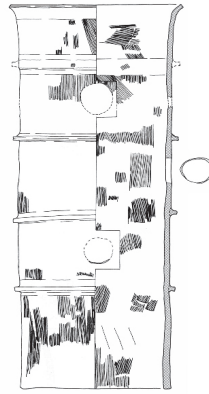
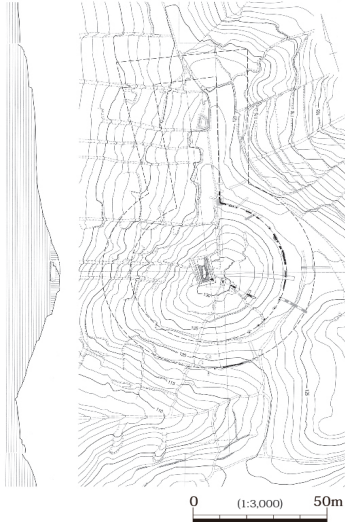


紡錘車形石製品 (緑色凝灰岩・碧玉)

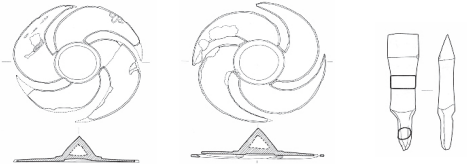


巴形銅器・鏡形石製品

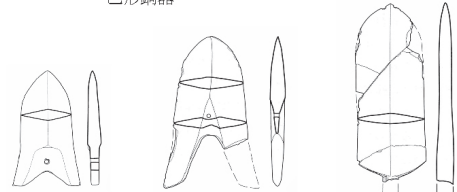
①玉手山 5号墳



円筒埴輪



巴形銅器

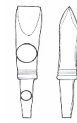


鏡形石製品

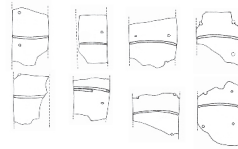
②東大寺山古墳



円筒埴輪



鏡形石製品

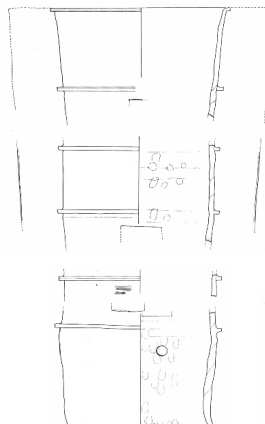
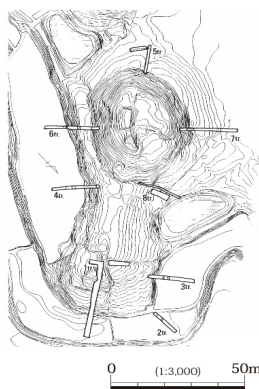


籠手



巴形銅器

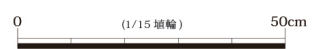
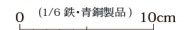
③富雄丸山古墳



簷付円筒埴輪

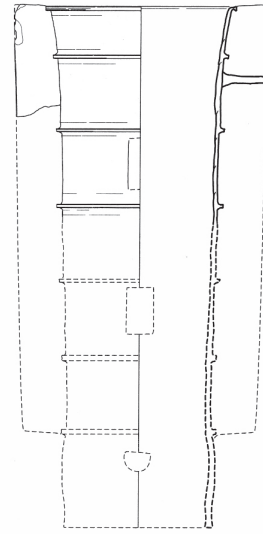
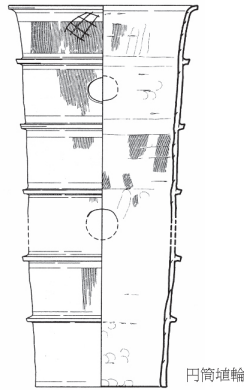
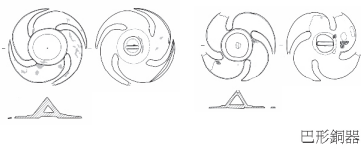
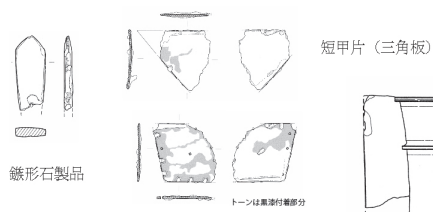
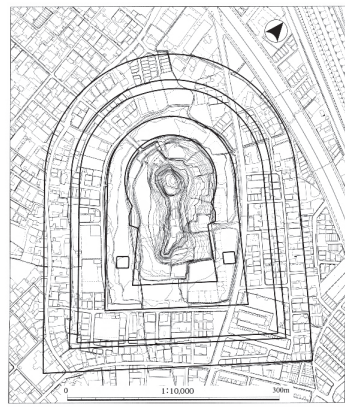


巴形銅器

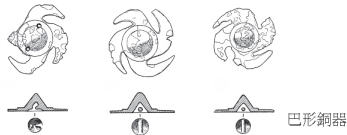
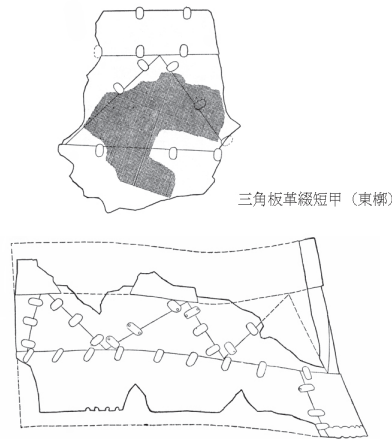
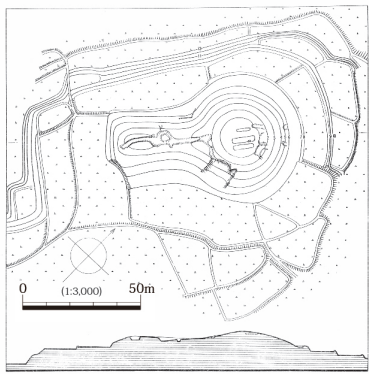


④佐味田宝塚古墳

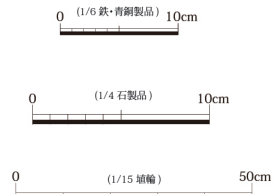
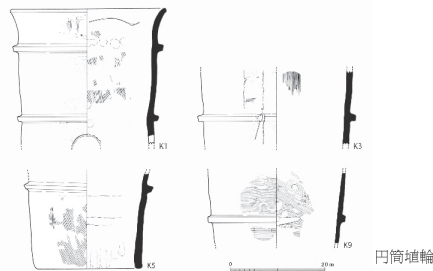
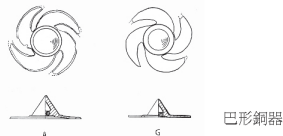
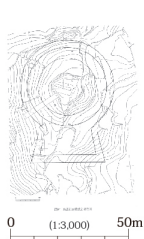
図4 日本列島の巴形銅器出土古墳 (古墳時代前期半ば～前期後半)



①津堂城山古墳

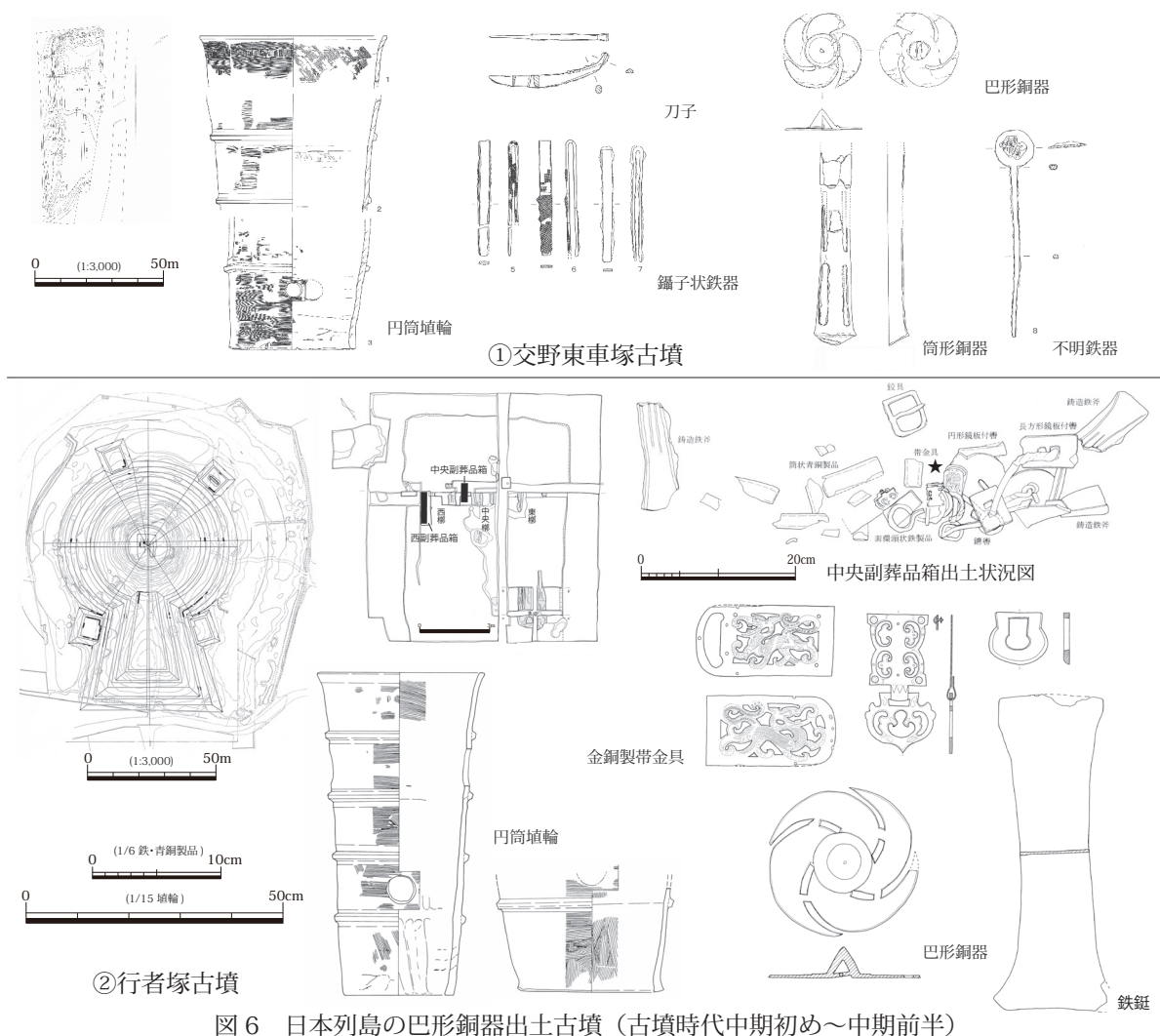


②和泉黄金塚古墳



③鳥居前古墳

図5 日本列島の巴形銅器出土古墳 (古墳時代中期初め)



重要な点は、むしろ金官加耶において4世紀第4四半期から巴形銅器や鍍形石製品が副葬されないことであり、この時期をひとつの画期として注目している（井上2006）。すなわち、大成洞2号墳を最後に、大型木槨墓には巴形銅器や鍍形石製品が副葬されない（図8）。その一方で規模の劣る木槨墓において、5世紀前葉まで倭系遺物が少量副葬されるが、鹿角製刀装具や豎櫛、鞆でありその内容は異なっている。そのため、4世紀末に金官加耶と倭との政治的関係に新たな変化が起こったものと推測する。このことは、河内平野に百舌鳥・古市古墳群が形成され始めた時期とも一致しており、当時の東アジア情勢の変化とも関連する現象といえる。おそらく大成洞古墳群の築造が中断されるまで金官加耶と河内勢力との交渉は続いたと推測されるが、この関係を直接的に示唆する倭系遺物の存在は確認できない。日本列島側では行者塚古墳（図6）から出土した鉄鋌や金銅製帯金具などがこの関係を裏付けている。

この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図200000（地図画像）を使用したものである。（承認番号 平19総使、第82号）

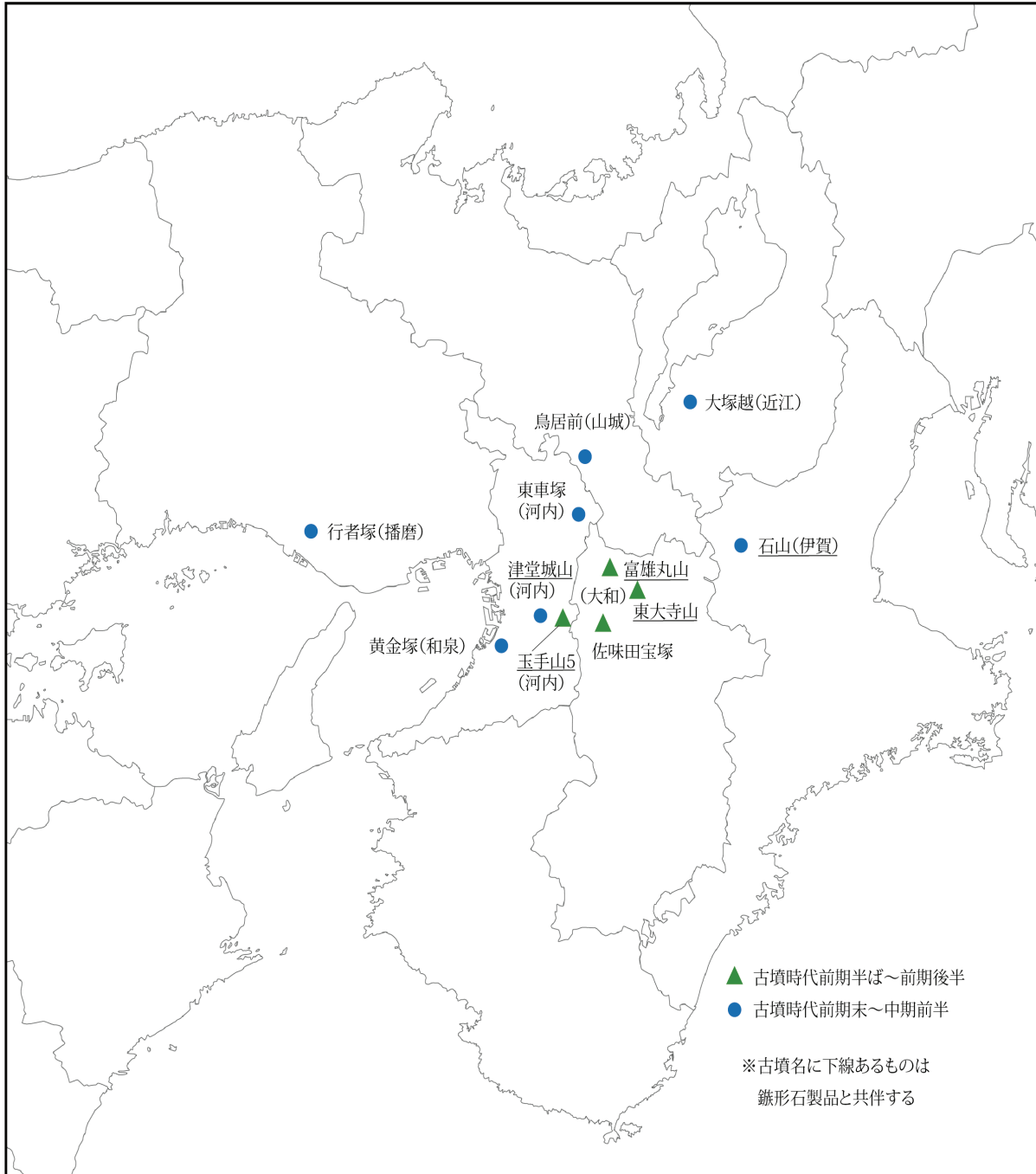


図7 巴形銅器出土古墳の時期別分布図



## IV. 4世紀~5世紀初頭におけるヤマト王権の政治的動向

### 1. 4世紀前半~後半—王権の伸長と対外交渉

金官加耶とヤマト王権の交渉が主になされた時期である。4世紀に入ると、鍬形石製品や紡錘車形石製品などの石製品や巴形銅器、銅鍬といった近畿地方を中心に分布する倭系の威信財が、大成洞古墳群に副葬され始める<sup>5)</sup>(図8)。その始まりは4世紀前葉の大成洞18号墳とみられ、紡錘車形石製品やヒスイ製勾玉が副葬されている。このうち、丁字頭ヒスイ製勾玉はヤマト王権との関わりが指摘できる遺物である。定型化した前方後円墳が出現した後、ヒスイ製勾玉の副葬は大和東南部の桜井茶臼山古墳から確認できる。

このように、金官加耶における倭系遺物の出現は、佐紀古墳群の成立にやや先行すると考える。すなわち既往の研究とは異なり、大和東南部勢力の時期から、朝鮮半島南部との交渉が成立していた可能性がある。

日本列島における朝鮮半島(加耶)系遺物の出現は、筒形銅器や豎矧板革綴短甲、又鍬が副葬された大阪府紫金山古墳(I-5期:4世紀前葉)を嚆矢とする。また初期段階には、京都府妙見山古墳(I-5期)において筒形銅器と小札革綴冑が、京都府瓦谷1号墳(II-1期:4世紀中葉)において方形板革綴短甲と小札革綴冑とが共伴しており、大和東南部勢力と関係の深い中国系遺物とともに朝鮮半島系遺物が出土する例が散見される。また、馬見古墳群の新山古墳(I-5期)では金銅製帯金具が、続く城山2号墳では筒形銅器と札甲が副葬されている。帯金具は晋代に系譜が求められるが、その入手経路として朝鮮半島南部を経た可性が高い。札甲も故地の問題はあがるが、同様に朝鮮半島南部を経由して入手されたものとする。

このほか、朝鮮半島南部との交渉が3世紀代にさかのぼる可能性を示唆するのが、奈良県黒塚古墳や愛知県東之宮古墳から出土した儀杖形鉄製品(Y字形鉄製品)の存在である。4世紀の滋賀県安土瓢箪山古墳においても出土例が確認されている。古墳時代前期の玉杖は、弥生時代の鹿角製品や木製品をモデルとして成立したとされるが、鉄製の儀杖には、朝鮮半島東南部の有刺利器の影響が認められる(大阪府立弥生文化博物館2004)。ただしこれらは有刺利器とは形態差があり、かつ個体差も大きいため、日本列島で製作されたと考えられるが、刺状の突起や蕨手文を模したとみられる円盤部などの特徴をもつ。

その後、朝鮮半島南部(加耶)との交渉を主導したヤマト王権は、大王墓の葬地を大和盆地北部(佐紀古墳群)から、そして河内平野(百舌鳥・古市古墳群)へと移す。ヤマト王権は記紀にみられるように大和の地に多くの宮殿を営みながら、葬地を移動した背景には、ヤマト王権中枢の主導権争いがあったとみるのが妥当かもしれない。加えて、大和盆地北部への移動の背景には対外交渉の窓口であった楽浪・帯方郡の滅亡があり、その影響が東アジア、倭国にまで及んだと推測される。ただし、大和東南部勢力から大和北部勢力への主導権の変化はゆるやかなものであったと考える。下垣仁志氏は、「大和北部様式」の鱗付円筒埴輪や器財埴輪、緑色凝灰岩製の石製品は大和盆地東南部にも存在し、「伝統鏡群」の「倭鏡」も大和盆地北部に副葬されていることから、この二地域間で器物や祭式が共通していることを指摘した。そして、両

5) 大成洞29号墳などから出土した定角式鉄鍬を倭系遺物の出現とみる見解(홍보식2014)もあるが、ヤマト王権中枢と関連づけるのは難しいと考える。



者を対峙する勢力とみるのではなく、その連続性・一体性を想定することも十分に可能であるとした（下垣2010）。

大和盆地北部に佐紀古墳群が、大和盆地西部には馬見古墳群が出現した4世紀中葉以降、それまで目立った首長墓が存在しなかった地域にも前方後円墳が築かれるようになった。一瀬和夫氏は、「これは瀬戸内から淀川・木津川・大和・東海といったルート沿いの古墳ばかりではなく、琵琶湖・若狭といった地域などを媒介として日本海側沿いに現れる古墳とも呼応しているかにみえる」とした（一瀬2005）。寺沢薫氏によって、この時期のBランク（全長120メートル前後）以上の前方後円墳の分布が整理されているが（寺沢薫2000）、福永氏や田中氏のように筒形銅器・巴形銅器・鉄製短甲といった特定の遺物を通じて、これらの首長墓と大和北部勢力を関連づけることができるのかはわからない。

確かに前期半ば以降、それまでみられなかった筒形銅器や巴形銅器、鉄製短甲が近畿地方を中心に一部の古墳に副葬されている<sup>6)</sup>。ただし、現在のところ大和北部におけるこれら遺物の様相は明らかでない<sup>7)</sup>。

また、ともに大和北部勢力と関連する遺物としながら、日本列島では筒形銅器と巴形銅器が一例外を除いて共伴することはない。大成洞古墳群で共伴するこれらの遺物が、日本列島ではなぜ共伴しないのであろうか。さらに、筒形銅器は加耶においてはその多くが大型木槨墓から出土するのに対し、日本列島では墳形や規模、副葬品の内容からみて、その多くが必ずしも有力な古墳ではなかった。一方で巴形銅器は、日本列島では前方後円墳に集中し、かつ規模の大きい有力な古墳で占められており、加耶でも大型木槨墓からのみ出土している。つまり、巴形銅

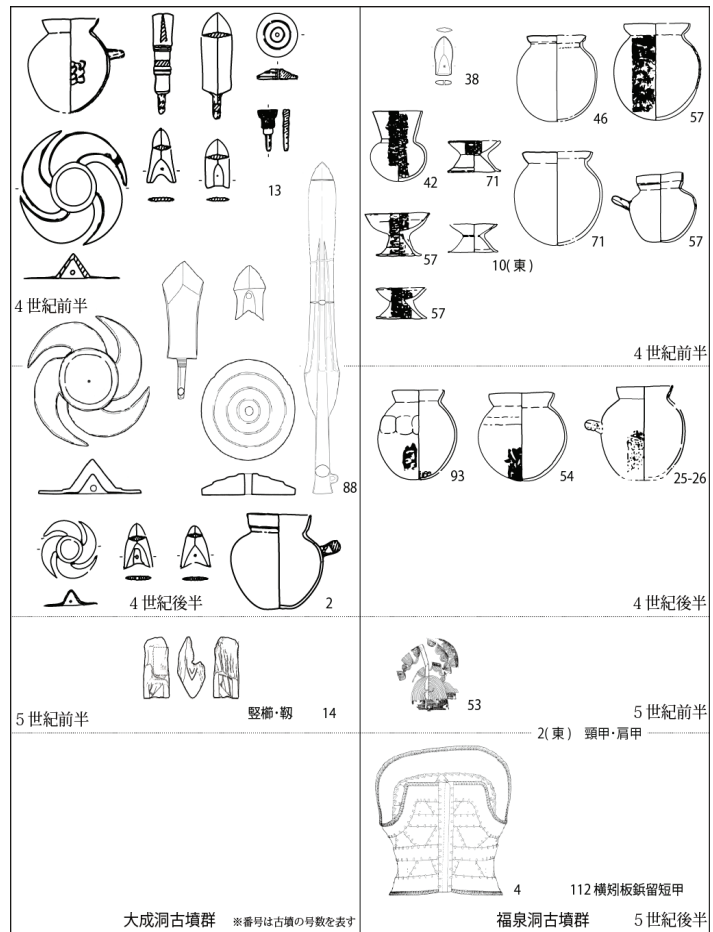


図8 大成洞古墳群および福泉洞古墳群出土の倭系遺物（縮尺不同）

6) 同じ頃、福岡県西新町遺跡をはじめとする博多湾岸の遺跡の衰退とともに、沖ノ島祭祀遺跡において岩上祭祀が開始され、ヤマト王権がより直接的に朝鮮半島と交流するルートが開拓された。4世紀後半の18号遺跡からは、倣製三角縁神獸鏡が出土しており、このことは佐紀古墳群が出現した以降も、大和東南部勢力の影響が依然としてあったとみられる。

7) 田中晋作氏の研究（田中晋2009）は遺物の分布論に大きく依拠するにも関わらず、その反面筒形銅器や巴形銅器、鉄製短甲が出土していない佐紀古墳群が、これら遺物ときわめて関係が深いとする。

器は加耶および日本列島ともに有力な古墳から出土しているが、金官加耶の威信財の一つである筒形銅器は、日本列島では主に中・小規模の古墳で見られる。日本列島における筒形銅器出土古墳と巴形銅器出土古墳はともにその多くが既存の有力な勢力ではなく、古墳時代前期後半以降に新たに台頭する新興勢力であったとされるが、このような遺物の出土状況からは、複数の勢力集団の存在が想定され、これらを互いに異なる勢力とみることも可能であろう。

この時期における筒形銅器や竪矧板革綴短甲、方形板革綴短甲を副葬する古墳が、いわゆる前方後円墳体制の枠組みのなかではさほど目立つ存在ではなく、円墳も多く、特に筒形銅器の場合はその傾向が顕著である。このことは、銅鏡や小札革綴冑をはじめとする中国系遺物の扱いとは異なっており、王権内で軍事面など実務的な役割を担った被葬者像が描くことができるのかもしれない。このことを積極的に評価すれば、王権内での職掌として捉えることも可能であろう。

これまで述べてきた4世紀前葉~後半のヤマト王権内の政治的状況は、一瀬和夫氏がいう「朝鮮半島南部とのより強力な結びつきを確保するため、畿内政権の東南部・東北部・西部の各内部勢力がそれぞれから派生する拠点地域と独自のルートをもとと放射状にその間口を拡げた結果、畿内内部各勢力と周辺各勢力それぞれのつながりとなって複数構造化した」（一瀬2005）とみるのが実情にふさわしい。このことは、筒形銅器と巴形銅器が日本列島では共伴せず、互いに異なる勢力として存在していたことと矛盾しない。いいかえれば、河内平野に百舌鳥・古市古墳群が築造されるまで、ヤマト王権内は過渡期的な政治的状況にあったとみられる。

残された問題としては、金官加耶とヤマト王権中枢の交渉ではあるが、当時のヤマト王権における威信財というべき器物は、銅鏡と腕輪形石製品（特に鍬形石）などの石製品であり、大成洞古墳群に副葬された倭系遺物の内容とは一致しない部分が見られることである（井上2016）。このことがはたして何を意味するのか今後の課題である。

## 2. 4世紀末—朝鮮半島情勢の変化と百舌鳥・古市古墳群の出現

4世紀末になると、巴形銅器や鍬形石製品などの威信財というべき倭系遺物は、大成洞古墳群においてその副葬が終了する（図8）。この時期がヤマト王権と金官加耶との関係における一つの画期である。大成洞2号墳を最後に、大型木槨墓には巴形銅器や鍬形石製品が副葬されず、規模の劣る木槨墓において倭系遺物が一部みられるものの、その内容は異なっている。すなわち、倭との対外関係において再び変動が起こった可能性が高く、このことは百済と倭との通交の開始や高句麗の南下政策など、東アジア情勢の変化と密接に関連したものとみられる。

一方、金官加耶内部でも政治的変動が起こっていた。初期金官加耶勢力と関連するとみられる福泉洞集団が、4世紀後半にはその関係から脱却し、新羅の影響を強く受けるようになったと考えられる。このことは福泉洞古墳群において、筒形銅器の副葬が遅くとも4世紀後半には終了する現象などから推測できる（表2・3）

また、4世紀後半から福泉洞25・26号墳や同31・32号墳で確認されるように、積石木槨墓が出現することと、同25・26号墳や同35・36号墳、同31・32号墳のように新羅土器の要素が金官加耶土器に加味され

始めたこととも無関係ではない。つまり、共通する土器様式であった金海地域と釜山地域が、4世紀後半から次第に土器様相において違いをみせる(図9・10)。このように、400年の高句麗南征以前に、福泉洞集団が金官加耶から離脱することによって、金官加耶の勢力構成にも新たな変化がもたらされたと考える(井上2006)。

倭では、河内平野に百舌鳥・古市古墳群が形成され始めた時期とも一致しており、河内勢力と金官加耶との交渉の開始といえる。その後、大成洞古墳群の築造が中断されるまで金官加耶との交渉が続いたことは、行者塚古墳(図6)などから出土した鉄鋌や金銅製帯金具などが裏付けている。

百舌鳥・古市古墳群の出現期には、それまで共伴することのなかった筒形銅器、巴形銅器、鉄製短甲が同一古墳群内において副葬されるようになる。すなわち、巴形銅器および鉄製短甲が大阪府津堂城山古墳、筒形銅器が大阪府盾塚古墳において副葬された。筒形銅器・巴形銅器・鉄製短甲が共伴した大阪府交野東車塚古墳や、巴形銅器・鉄製短甲が共伴した京都府烏居前古墳、大阪府和泉黄金塚古墳などがこの段階の新興勢力である。つまり、これら遺物の副葬は、百舌鳥・古市古墳群の勢力が隆盛を迎えるまでの時期、すなわち定型化した甲冑の生産および供与が一括しておこなわれるまでの段階(田中晋1981)に該当する。上述した「畿内内部各勢力と周辺各勢力それぞれのつながりとなって複数構造化した」政治的状况から、これを一体化した点で古市・百舌鳥古墳群の成立を評価することができる。その後、百舌鳥・古市古墳群勢力は鉄製甲冑の生産体制を整備し、自身の中心古墳に甲冑を副葬し、ヤマト王権内における政治的求心力を高めていくのである。

### 3. 5世紀前葉以降—ヤマト王権と朝鮮半島南部の対外交流の多様化

高句麗南征による金官加耶の衰退は、大成洞古墳群において大型古墳の築造中断としてあらわれる。そして、大成洞古墳群において5世紀中葉以降の倭系遺物は確認できなくなる。倭では5世紀に入り、近畿地方中央部において渡来系鍛冶工人が出現し、武具や馬具が生産されるなど鉄製品の生産量が増大していく。この5世紀代の膨大な鉄器生産を支える鉄素材の供給が、朝鮮半島のどの地域からなされたのかは重要な問題である。孫明助氏は、4世紀まで鉄生産を主導した金官加耶の生産集団は瓦解し、新羅勢力への吸収または他地域への離脱など、再編されたものとみる(孫明助2003)。

実際に、鉄・鉄器生産遺跡における倭系遺物の出土は、金官加耶衰退後には全羅道地域などで確認されているが、非常に限定的である。この時期の鉄素材の入手には、朝鮮半島南部における倭系遺物や倭系古墳の分布から、おそらく釜山地域(これを新羅からとみるかは検討の余地あり)や西部慶南地域(加耶西部)、榮山江流域等が関連したと考えられる(井上2014b, 2017)。

またこの時期は、ヤマト王権の所在する近畿地方だけでなく、王権と結びつきが強い各地の遺跡では朝鮮半島から直接入手したとみられる文物や、渡来人の居住を示す痕跡が確認されるようになる(田中史2016)。渡来人は、朝鮮半島情勢が不安定な5世紀を前後する時期からその存在が確認できる。遺物の系譜から、その故地は金官加耶のみならず、阿羅加耶や馬韓・百濟、新羅など多様であったことがうかがえる。渡来人たちによって、近畿地方を中心に朝鮮半島から日本列島へさまざまなモノ、技術、思想などが伝わったが、渡来文化と技術の移転に関して、当初はヤマト王権の直轄で行われる場合と各地の有力勢力が独

自に渡来人を抱えて生産活動を行う場合の双方が併存していたとみられる（花田2002）。

以上のような様相からは、それまでの金官加耶との交渉だけではなく、朝鮮半島南部とヤマト王権（倭）との交渉は多様化が進むことから、古代日朝関係において5世紀前葉の時期を大きな画期と評価することができる。これを裏付けるように、5世紀中葉以降の倭系遺物は、それまでの出土様相とは大きく異なってくる。

表2 筒形銅器副葬古墳の編年（本稿編年表）

時期	福泉洞古墳群	大成洞古墳群	良洞里古墳群	筒形銅器副葬状況
4世紀 1/4	38号墳②, 73号墳②	18号墳②		副葬開始
2/4	42号墳①, 60号墳③, 64号墳②, 71号墳②	(15号墳① 未報告)		福泉洞： 副葬終了
3/4		2号墳②	4世紀後半代： 304号墳③, 340号墳① (未報告：105号墳①, 321号墳①, 331号墳②, 352号墳②, 443号墳③, 447号墳②)	良洞里： 副葬開始 (広形銅矛副葬?)
4/4		39号墳②		
5世紀 1/4		1号墳⑥, 11号墳①		副葬終了

表3 筒形銅器副葬古墳の編年（申敬澈 2004）

時期	福泉洞古墳群	大成洞古墳群	良洞里古墳群	金官加耶土器編年(申2005)
4世紀 1/4				II段階
2/4	38号墳, 73号墳	15号墳, 18号墳		III段階
3/4	42号墳, 60号墳, 64号墳, 71号墳	2号墳	443号墳	IV段階
4/4		39号墳	105号墳, 331号墳, 340号墳, 352号墳	V段階
5世紀 1/4		1号墳, 11号墳	304号墳, 321号墳, 447号墳	VI段階

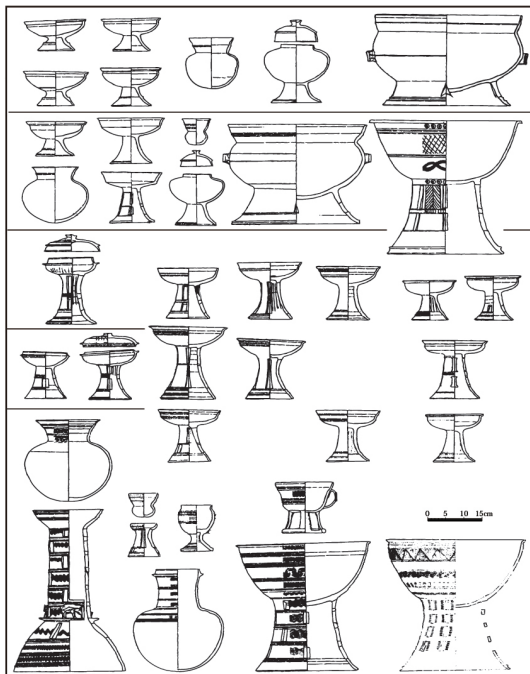


図9 福泉洞古墳群における副葬土器の変遷

(上：60号墳(副)、中：95号墳、下：25・26号墳、35・36号墳、31・32号墳  
4世紀後半～5世紀初頭)

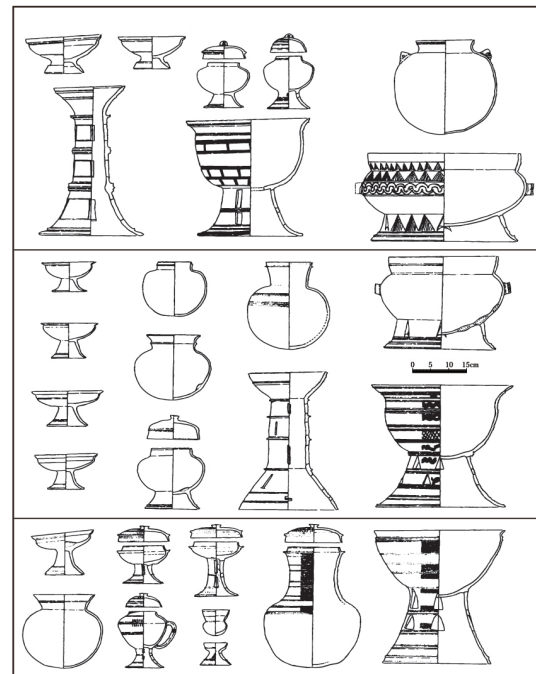


図10 大成洞古墳群における副葬土器の変遷

(上：2号墳、中：3号墳、下：1号墳 4世紀後半～5世紀初頭)



分布範囲が広がり、金海・釜山を中心とする朝鮮半島東南部のみならず、西部慶南地域（加耶西部）や朝鮮半島西南部の栄山江流域などへも及んでいる。また、新羅地域でも倭系遺物が確認されている。さらに大きな変化としては倭系遺物の出土だけでなく、墳丘形態（前方後円形）や葺石、横穴式石室のような遺構（構造物）がみられる点である。倭系遺物の内容も増え、須恵器、イモガイ製雲珠（南海諸島産の貝）、木棺材（コウヤマキ）、埴輪、石製模造品、倭鏡、鹿角製刀装具などが確認される。

## V.まとめ

古墳時代の倭国が朝鮮半島の三国および加耶諸国のうち、とりわけ金官国（金官加耶）との関係が深かったことは明らかである。金官加耶の故地である金海を中心に、洛東江下流域では三国時代以前より倭と関連する遺物が確認されており、三国時代になるとその中心古墳群である大成洞古墳群に倭系遺物が集中して副葬されている。

これまで述べてきたように、4世紀前葉にヤマト王権と金官加耶との交渉が開始されたのち、4世紀末になるとその関係に大きな変動が起こった。その背景には、百済と倭との通交開始や高句麗の南下など、東アジア情勢の変化と密接に関連していたものと推測される。一方、倭では河内平野に百舌鳥・古市古墳群が築造され始めた時期とも一致しており、河内勢力と金官加耶との交渉が開始された時期に該当する。

その後、5世紀以降の朝鮮半島南部との交渉は、上述した4世紀における交渉を基礎として大きく発展したとみて、百舌鳥・古市古墳群の出現などヤマト王権の動向とあわせてみても、5世紀前葉は大きな画期にあたる。5世紀以降の渡来人の活躍を考えるうえでも、4世紀の交渉関係を理解することが肝要となる。ヤマト王権の直轄で、渡来文化と技術の移転がなされた背景には、このような当時の情勢に対応する必要性と、これを契機とした王権発展への目論見があったのであろう。

ヤマト王権の成立や伸長といった過程は、加耶をはじめとする朝鮮半島南部の諸勢力の成長過程と非常に共時的な様相を示している。そして、これらは中国を含めた東アジア世界の動向と密接に関連しており、やはり全体を見渡した研究が必要である。交渉関係をあらかず考古資料は断片的な情報も多いが、2000年代以降の発掘件数の増加とともに関連資料は蓄積されてきている。今後も引き続き詳細な検討が行いながら、また日本列島出土の朝鮮半島系遺物に関する認識も格段に飛躍してきており、両者をつきあわせて改めて検討する必要がある。

\* 本稿作成にあたっては、2018年度関西大学若手研究者育成経費の支援を受けた。



## 参考文献

- 東潮, 2005, 「加耶と倭の歴史環境」, 『朝鮮学報』 196.
- 一瀬和夫, 2005, 『大王墓と前方後円墳』, 東京: 吉川弘文館.
- 井上主税, 2004, 「金海および釜山地域古墳出土の倭系遺物について」, 『堀田啓一 先生古稀記念献呈論文集』.
- \_\_\_\_\_, 2006, 『嶺南地方 출토 倭系遺물로 본 한일교섭』, 慶北大学校文学博士学位請求論文.
- \_\_\_\_\_, 2014a, 『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』, 東京: 学生社.
- \_\_\_\_\_, 2014b, 「朝鮮半島南部における鉄・鉄器生産遺跡と倭系遺物」, 『韓式系土器研究』 13.
- \_\_\_\_\_, 2016, 「金官加耶と倭の交流—巴形銅器出土古墳の検討を中心に—」, 『금관가야 고분의 축조세력과 대외교류』.
- \_\_\_\_\_, 2017, 「朝鮮半島初期鉄器時代～三国時代の鉄・鉄器生産遺跡出土の倭系遺物について」, 『日本考古学協会第83回総会 研究発表要旨』.
- 大阪府立弥生文化博物館, 2004, 『大和王権と渡来人 三・四世紀の倭人社会』.
- 鐘方正樹, 2005, 「玉手山古墳群の消長と政権交替」, 『玉手山古墳群の研究V-総括編-』, 柏原市教育委員会.
- 홍보식, 2014, 「금관가야의 국제교류와 외래계 유물」, 『외래계 유물로 본 금관가야의 국제교류와 사회구조』.
- 小浜成, 2003, 「円筒埴輪の観察視点と編年方法—畿内円筒埴輪編年の提示—に向けて」, 『埴輪論叢』 4.
- 심재용, 2016, 「金官加耶의 外来系 威勢品 受用과 意味」, 『嶺南考古学』 74.
- 下垣仁志, 2010, 『古墳時代の王権構造』, 東京: 吉川弘文館.
- 申敬澈, 1993, 「加耶成立前後の諸問題-最近の発掘調査成果から-」, 『伽耶と古代東アジア』, 東京: 新人物往来社.
- 申敬澈, 2001, 「嶺南出土の土師器系土器」, 『3・4世紀日韓土器の諸問題』, 釜山考古学会ほか.
- 孫明助, 2003, 「가야의 철생산과 유통」, 『가야고고학의 새로운 조명』.
- 田中晋作, 1981, 「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」, 『ヒストリア』 93.
- \_\_\_\_\_, 1996, 『古代国家の黎明-4世紀と5世紀の狭間で-』, 池田市立歴史民俗資料館.
- \_\_\_\_\_, 1998, 「筒形銅器について」, 『網干善教先生古稀記念考古学論集』.
- \_\_\_\_\_, 2000, 「巴形銅器について」, 『古代学研究』 151.
- \_\_\_\_\_, 2009, 『筒形銅器と政権交替』, 東京: 学生社.
- \_\_\_\_\_, 2012, 「猪名川流域に投影された政権中枢勢力の動静」, 『菟原Ⅱ』.
- 田中史生, 2016, 『国際交易の古代列島』, 東京: 角川選書.
- 寺沢薫, 2000, 『王権誕生』(日本歴史第02巻), 東京: 講談社.
- 寺沢知子, 2017, 「古墳の属性と政権動向—4世紀前半期を中心に—」, 『纏向学研究』 第5号.
- 橋本達也, 1996, 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」, 『雪野山古墳の研究』, 滋賀県八日市市教育委員会.
- 花田勝広, 2002, 『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織』, 東京: 雄山閣.
- 福永伸哉, 1998, 「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」, 『青丘学術論集』 12.
- \_\_\_\_\_, 2005, 『三角縁神獣鏡の研究』, 大阪: 大阪大学出版会.
- 柳本照男, 2001, 「金海大成洞古墳群出土の倭系遺物について」, 『久保和士君追悼考古論文集』.
- 山田良三, 2000, 「筒形銅器の再考察」, 『考古学論攷』 23.

## 挿図出典

図1~3：(井上2014)を一部改変.

図4：近つ飛鳥博物館, 2013, 『百舌鳥・古市古墳群出現前夜』(大阪府立近つ飛鳥博物館写真提供), 東大寺山古墳研究会ほか, 2010, 『東大寺山古墳の研究』, 奈良県教育委員会, 1973, 『富雄丸山古墳』, 河合町教育委員会, 1986, 『佐味田宝塚古墳』.

図5：藤井寺教育委員会, 2013, 『津堂城山古墳』, 末永雅雄ほか, 1954, 『和泉黄金塚古墳』, 大阪大学鳥居前古墳調査団, 1987, 『鳥居前古墳』.

図6：交野市教育委員会, 2000, 『交野東車塚古墳』, 加古川市教育委員会, 1997, 『行者塚古墳発掘調査概報』.

図7：(井上, 2016) この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図200000(地図画像)を使用(承認番号平成19総使、第82号).

図8：井上主税, 2016, 「騎馬文化受容前後の倭と百済・加耶との関係」, 『騎馬文化と古代のイノベーション』を一部改変.

図9・10(井上2014, 表1：(심재용2016)を一部改変, 表2・3：(井上2014).

## A study of fourth-century Yamato – Gaya relations : A focus on in-kingdom trends

Inoue chikara  
(Kansai University)

The discovery of Japanese artifacts in the Gimhae Daeseong-dong tombs and Gaya artifacts in Japan indicates the presence of trade relations between Japan and Gaya—located in the southern Korean peninsula—conducted by the Yamato southeast force.

This is corroborated by the discovery of Japanese triangular-rimmed mirrors, decorated with images of immortals and beasts, at the Okinoshima ritual site, which has been tied to Yamato-Gaya relations since the latter half of the fourth century.

A cylindrical bronze object and bronze whorl plaque with central boss were evaluated as artifacts that point to relations with the Yamato northern force (Saki Tumulus). However, burials do not continue in specific Kofun groups and areas that were central to the distribution. This lack of a region suggests that it is difficult to tie the distribution to a particular force. It should be noted that the two artifacts are not commonly associated and the tombs in which they were found could have existed as separate forces.

In other words, the Yamato kingdom experienced a transitional political situation alongside changes in the East Asian situation in the middle of the fourth century. This continued until the Mozu-Furuichi Tumulus that appeared in the Kawachi plain reached its peak.

**Keywords** | Japanese artifacts, Yamato kingdom, Geumgwan Gaya, Daeseong-dong tombs, East Asia